事例番号 093　まち全体を博物館に（滋賀県長浜市）

1. 背景

長浜市は琵琶湖の北東岸に位置する「湖の真珠のようなまち」（姉妹都市アウグスブルクの市長の言葉）である。羽柴秀吉がはじめて一国一城の主となった地であり、秀吉によって「今浜」が「長浜」に改められ 1574 年に城が築かれた。秀吉は小谷城下の商人を統合して「楽市楽座」の制度で城下町を形成するとともに、町衆の保護・自立のために「町屋敷年貢免除」の朱印状を与え、まちの繁栄をもたらした。1615 年には廃城となり、長浜は彦根藩の一部となったが、「町屋敷年貢免除」は江戸時代を通じて維持され、長浜は水運の要に位置するまち、浜ちりめんやビロード、蚊帳などの商工業のまちとして繁栄を続けた。

このような経済力を背景に町の文化も栄えた。例えば、男児出生を祝って砂金を振舞った秀吉に恩義を感じた町衆がその金子を元に「曳山」を建造したが、江戸時代中頃にはその曳山は各地の名工を招いて建造する豪華絢爛なものになっていった。このような町衆の経済力が自治の気風を養った。その町衆の心の拠り所として真宗大谷派長浜別院大通寺（「御坊さん」）があり、長浜は湖北の真宗の中心地、すなわち門前町としても栄えた。

明治時代に入り、1984 年には湖岸沿いの旧城郭地区と中心市街地との間に南北に鉄道が敷設された。1937 年には市街地の東端に国道が建設され、1969 年にはその東側にバイパスも建設された。1980 年にはさらにその東側に北陸自動車道が建設された。また、1992 年には JR の新快速電車が関西から乗り入れるようになった。

このような交通の便の飛躍的向上は、長浜市を湖北地方の中核都市として一層発展させてきたが、それは次第に中心市街地の衰退原因のひとつともなってきた。1970 年代以降のモータリゼーションの急激な進展は人口の郊外流出を生じさせ、その裏で都心人口の高齢化を促進させた。それに伴い都心で空き店舗が増加するようになった。

1980 年代以降の大型店の郊外立地は、都心の衰退をさらに加速させることとなった。都心に大型店を構えていた平和堂と西友とは 1979 年に郊外に大型店を出店する申請を行った。調整の結果、前者は移転を凍結したが、後者は地元の商業者も出店させるという条件で 1988 年に都心の店を閉めて郊外に「長浜楽市」というショッピングセンターを出した。その際、地元出店者は都心の店を閉めないという取り決めを市との間で行った（「長浜方式」）。さらに 1996 年にはアルプラザ長浜店（平和堂系）、メガマート（市外、イオン系）、ビバシティ（市外、平和堂系）が、2000 年にはジャスコが郊外に大型店を出し、大型店競争が激化した。そして西友は 2005 年にウォルマートに売却され、地元商業者の約半分は撤退することとなった。その結果、都心に戻ってきたものもあるが、かなりは消滅してしまった。

以上の背景の下で都心の空洞化が顕著に進んできたが、それに対処するためさまざまな対策も並行して実施されてきた。それらの対策では、大型店にはない中心市街地の魅力を引き出すこと、より多くの人々をひきつけられる魅力ある場所をつくることが重視されてきた。

2. 目標

「長浜らしさを生かして美しく住む」がまちづくりの目標である。これは 1994 年に策定された「新・

博物館構想」で打ち出された。同構想はその目標に向かう原動力を「人がまちを動かす」と表現している。1984 年に策定された旧「博物館構想」では「まち全体を博物館にしよう」という目標の下、「今まで培われてきた文化や伝統、資源を現代に生かしながら新しい文化を生み出し、個性と魅力のあるまちづくりを進めよう」という理念を掲げていたが、その精神は新構想に引き継がれている。

3. 取り組みの体制

㈱黒壁をはじめとする多くの民間組織、市民組織と長浜市とが連携してまちづくりを進めている。それは、市が最初に具体的な計画を事細かく提示してそれに沿って各組織が事業を展開するという関係ではなく、民間の組織の自発的、自主的な取り組みを市が支援しつつ、個々の事業の集積としてまちを形成するという関係である。

長浜市市街地図 （資料:長浜市観光振興課(部分)）

4. 具体策

(1) 取り組みの概要

長浜市のまちづくりといえば直ちに㈱黒壁が連想されるほど黒壁の成功は全国的に有名になった。そして、長浜市の他の取り組みはそのかげに隠れてしまっている観がある。そのため、黒壁の成功のみに着目する人がいる一方、黒壁を単なる観光施設とみなしてまちづくりではないと示唆す

る人もいる。しかし、実際には長浜市、㈱黒壁、その他の組織の取り組みは一体的に行われてきている。ここではその全体の概略を表で示しておきたい。この表は、長浜市の資料「長浜市のまちづくり年表」からの抜粋である。同年表では、まちづくりを①独自のミュージアムづくり、②オールドタウンの再生、③都市景観・アメニティづくり、④個性あるイベントの創出、⑤表彰・コンベンション、⑥上記以外に分けて記述しているが、ここでは①、②、④の一部を引用する。

「長浜市のまちづくり年表」（長浜市資料）抜粋

年	独自のミュージアムづくり	オールドタウンの再生	個性あるイベントの創出
1983	長浜城歴史博物館の開館		長浜出世まつり開催
84		魅力ある商店街街づくり事業創設	
85	長浜の迎賓館・慶雲館の改修		
86		大通寺通りと大通寺の整備（石畳整備、橋の修景、まちかど広場の整備、雁木方式の統一ファサードの整備等） 美しい観光地づくり事業創設	
87		観光物産センター「お花館」開設	長浜芸術版楽市楽座
88		北国街道整備事業開始	
89		黒壁スクエアオープン 市民国際交流協会結成 大通寺を守る会結成	
90	曳山博物館建設検討委員会発足	物産館「札の辻」オープン 「ギャラリー楽座」オープン 「北国街道町衆の会」発足	長浜南部メルヘン祭り開催
91			琵琶湖湖北路ロマンルネッサンスフェスティバル開催
92	オーストラリア・ラッテンベルグ市とのガラス街道提携	黒壁ガラス鑑賞館オープン	
93・4			長浜ツーデーマーチ
95		北国街道の整備 大通寺保存再生調査	長浜ツーデーマーチ
96	国際文化交流ハウスGEOオープン 三成フェスティバル	北国街道一夜門設置	長浜ツーデーマーチ 北近江秀吉博覧会
97	三成フェスティバル	プラチナプラザオープン 博物館通り整備（ファサード）	長浜ツーデーマーチ 豊公まつり

			びわこ全国邦楽フェスティバル
98	北国街道安藤家開館 古美術西川郷土資料館開館 三成フェスティバル	まちづくり役場オープン ゆう壱番街整備（ファサード統一新改装）	湖北恵みの祭典 長浜着物の集い
99	曳山博物館の建設 三成フェスティバル	博物館通り整備（道路美装化、ポケットパーク整備、モニュメント設置）	湖北盆梅トライアングル事業 ドイツアウグスブルク市における長浜展
2000	曳山博物館の開館 慶雲館新館「梅の館」の開館 石田三成 400 年祭 石田三成公情報発信推進会議の発足	開知学校オープン 博物館通り整備（道路美装化）	
01		ビアレ・ルーチェ開催	第 50 回長浜盆梅展

（2） 主な取り組み

ここでは主に長浜市の資料に拠りながら、分野別に主な取り組みを紹介する。

① 独自のミュージアムづくり

1） 長浜城歴史博物館（長浜城）の建設

「長浜城を再びこの地に」という願いは以前から市民の間にあったが、モータリゼーション等で中心市街地が次第に寂れていくのを目の当たりにしてその気運が急速に高まり、市民から多額の募金・浄財（4 億 1、595 万円）が集まった。それにより再建にとりかかり、1983 年に「長浜城歴史博物館」として開館した（総建設費約 10 億円）。この再建は市民の自主的な活動が原動力となって実現したため、市民が「やればできる」との手応えを持ち、これが以後のまちづくりの契機となった。

再建成った長浜城

2）長浜市博物館都市構想の策定

長浜城歴史博物館の開館後、琵琶湖沿岸部への人出は多くなったものの、長浜駅の東側にはほとんど回遊がないという実態が明らかになってきた。そのため、中心市街地を含めて長浜市全体での人の交流を図らなければならないという問題意識が強くなり、それを実現するため 1984 年に「長浜市博物館構想」が策定された。そして、それに沿って次項のさまざまな事業が展開されることとなった。「博物館構想」は先に述べたようにその後「新・博物館構想」に改定されているが、当時の考え方が今でも長浜市のまちづくりのメイン・テーマになっている。

② オールドタウンの再生

1）ながはま御坊表参道の整備

「博物館構想」に基づき、1986 年に大通寺通り（今の「ながはま御坊表参道」）及び大通寺の整備が開始された。これは、主に大通寺参道の修景を行うことにより、歴史にマッチした景観形成と商店街の環境整備とを図ろうとしたものである。事業内容は、市道の石畳整備、橋の修景、まちかど広場の整備、雁木方式の統一（ファサードの整備）、駐車場の整備、大通寺の修復等であった。

大通寺通りには県下で 2 番目に架けられたアーケードがあったが、それで肝心の大通寺が見えなくなっていた。そのため、1988 年にアーケードが撤去され、石畳舗装工事と店舗の統一改修工事とが行われ、2 年間で完成した。それぞれの店舗は自主的に雁木方式で 1.2mずつセットバックして軒先を歩行空間化した（その際に、通りの名称は「ながはま御坊表参道」になった）。これにより商店街の雰囲気が各段に明るくなった。また、ファサードは白壁に統一し、瓦は一文字瓦を使用した。

石畳舗装は 1987 年から開始されていたが、1989 年に完成した。あわせて駅前通り入口に緑のある市営駐車場をオープンさせた。また、道路中程を横切って流れる米川に架かる針屋橋を 1987 年に拡幅し、欄干や手すりのデザインを地元に因んだものとした。その他、山門前広場の整備、ライトアップ事業等を行った。

2）北国街道の整備

1988 年から 1991 年にかけて北国街道の駅前道路から南側を半剛性舗装した。また、1991 年から 1992 年にかけて同北側を石畳舗装した。1989 年には、駅前道路南側にある日の出橋を櫛形橋に修景した（長浜出身の小堀遠州が京都につくった弧蓬庵の櫛形橋をモチーフにデザイン）。また、1992 年度から 1994 年度にかけては、駅前通りの北側の店舗について看板の修景を行った（プラスチック製の看板を撤去して木目の厚木等を使ったものにした）。

3）商業観光推進事業

中心市街地全体を対象に 1988 年度に開始された事業である。パラペットで覆われてしまった店舗を元の重厚な町家の顔（大屋根、格子等）に戻すために、市が改修費の 2 分の 1 を補助する（上限 200 万円、2004 年度からは 150 万円、夜の賑わい創出効果がある場合はプラス 50 万円）というもので、2005 年度末までに 59 件の事業が完成した。この事業により街並みに統一感が生まれ、空き店舗の活用促進におおいに役立っている。

4）まちづくり組織の活動

長浜市には、市民自らが出資してまちづくり活動を行っている組織が数多くある。そのさきがけのような形になったのは観光物産センター「お花館」である。これは大通寺通り整備の際に1軒だけ空き店舗として残ってしまったものを活用するために、商店街振興組合、観光物産協会、観光協会等の地元関係者が資金を出し合って 1987 年に出店したものである。通りのイメージを固める重要な役割を果たしたが、売上げ減少のため 2005 年に閉店し、現在はポイントカードの事業を行う「長浜倶楽部」の事務所になっている。1997 年には「プラチナプラザ」（任意団体）が設立された。55 歳以上の市民が出資し（他の市民組織である「経営者会議」が支援）、高齢者のための活動の場を提供するために空き店舗を利用して「おかず工房」「野菜工房」（野菜直販）「リサイクル工房」「井戸端道場」（高齢者が集まる喫茶店）の4つの店を出店している。1998 年には「まちづくり役場」が設立された（1999 年に NPO 法人化）。元金物店の空き店舗を活用して、プラチナプラザの事務局、学習会、観光ガイド、黒壁グループ協議会事務局、感響フリーマーケットの運営等の機能を果たしている。

長浜まち歩き MAP （資料：NPO 法人まちづくり役場（部分））

この他様々なまちづくり組織があるが、それらの中でとりわけ有名なのが㈱黒壁である。北国街道沿いにあった明治建築「第百三十銀行長浜支店」（愛称「黒壁銀行」）の取り壊しが 1987 年に決まると、それを惜しむ有志が地元企業 8 社及び市に出資を募り、㈱黒壁を同年設立して建物を買い取った。それを商店街活性化に役立てるべく歴史性、文化・芸術性、国際性の観点からさまざまな利用方法を探ったが容易に応えは見出せず、そうした中、地元産業ではないもののガラスではどうかとの意見が出されて議論の行き詰まりが打開された。そしてヨーロッパのガラス工房等を見学し、買い付けを行い、1989 年、「黒壁ガラス館」をオープンさせた。その結果、かつては 1 時間に人 4 人と犬一匹しか通らないと言われた場所（笹原司朗前社長の観察）が 1 ヶ月で 2 万人もの人が訪れる場所へと変身した。

この成功を足場に、㈱黒壁は工房、ガラス鑑賞館（2004 年に「黒壁美術館」に改称）、レストハウス、観光案内所、飲食店、菓子店等を順次オープンさせ、まちづくり活動を拡大してきた。また、北国街道を「ガラス街道」とすべく周辺の古建築の活用を働きかけ、現在では約 30 店舗のグループに発展している。㈱黒壁は、グループ店を募る際、まず適切な不動産を自ら押え、必要に応じて改修、建築し、その上で適切な経営者を探して不動産を売却し、経営を指導した。このような方式は、まち全体を統一的な理念に基づいて経営する上で大きな効果を発揮した。

表参道から大通寺山門を見る

北国街道

改装支援で整備されたファサード

黒壁ガラス館

③ 個性あるイベントの創出

長浜は歴史的な自治の町であり、江戸時代になっても町民自治が認められていた。そのため古くから町衆主体の祭りが行われてきたが、最近でも市民発案のさまざまな催しが創出されている。

「長浜出世まつり～きもの大園遊会」は、1983 年に長浜城が再建されたのを契機に始められた地元の人たちの手作りイベントである。祭りの中心行事は、全国から参加した晴れ着の女性約 1,800 人が既成市街地商店街を舞台に園遊会を開くというものである。

「長浜芸術版楽市楽座～ART IN NAGAHAMA」は、1987 年から毎年秋に開催されているもので、全国から集まったアーティスト、クラフトマンが創作、展示即売を行う青空芸術市である（200 以上の畳一畳分のスペースをブースとして商店街の真ん中に並べる）。商店街活性化の一環として商店街関係者中心の市民が実行委員会をつくって自主的にやっている（大手門通り、表参道、ゆう壱番街等）。作品は市内の飲食店、理美容店、スーパーなどで組織する「長浜ギャラリーシティ」のウインドウに常設展示販売される。かつては湖側でやっていたものを、1993 年から東側でやるようになった。現在は出世祭りの一環になっている。

その他、「北びわ湖大花火大会～ありがとう花火」、「観光ボランタリーガイドによるまちの案内」等が行われている。

5. 特徴的手法

全体の計画を行政が上からかぶせるという「都市計画方式」ではなく、いくつもの民間組織のそれぞれの活動を行政が支援するという「都市経営方式」である点が大きな特徴である。この方式は近江の人々の自主自立の気風に由来するところが大きいと思われる。実際、多くの市民組織が市民自らの出資で成り立っており、その運営もユニークで創意工夫のあるものが多く見られる。そのような独立・創造の精神の上に「博物館都市構想」という市民と行政とが共鳴できるまちづくりの理念を持ったことが、まちづくりの大きなムーブメントにつながった。行政ではなくまちの人々がまちづくりの主体になるべき時代になりつつあることを考えると、長浜のまちづくりは全国のまちづくりに大いに参考になるものであろう。

6. 課題

1997 年に郊外にいくつかの大型店舗が進出すると、それまで少しずつ伸びていた商店街の売上高が減少に転じた。その後回復に転じたものの、商業基盤は依然として弱い。人口は 1998 年頃まで大きく減少しその後横ばい傾向で推移しているが、それは駅の西側に大きなマンションが出来てきた影響であり、中心市街地の人口減少、高齢化には歯止めがかかっていない。

黒壁は大成功であったが、周囲の商店街との違いが浮き彫りになっている。観光客で賑わっている地区であるが、夕刻には観光客がいなくなる。その後、かなりの数の店主も店を閉めていなくなってしまう。また、モノづくりよりも販売に重点が置かれているとの意見もある。そのようなことから、地元の人々が活動するまち、職住一体のまちになっていないという意見も聞かれる。それは、黒壁があまりにも成功したが故に目立ってきた問題という側面もあり、今後の活動のさらなる多様な展開が期待される。

中心市街地では今のところ日常の一通りの買い物はできる環境が維持されているが、店と店との間が離れている地区があるという問題がある。そのような店の間を埋めていくためには、大型店に

はないモノ、その地区にしかない商品を見出して、それをアピールし、地区の魅力を高めていく必要がある。いま長浜市はそれに取り組んでいる。

（参考・引用文献）

長浜市ホームページ
㈱黒壁ホームページ
佐藤滋＋城下町都市研究体編著『図説城下町都市』鹿島出版会、2002 年
日本建築学会編『中心市街地活性化とまちづくり会社』丸善、2005 年
日本政策投資銀行地域企画チーム編著『中心市街地活性化のポイント』ぎょうせい、2001 年
国土交通省総合政策局事業総括調整官室監修『自立型地域コミュニティへの道』ぎょうせい、2004 年
藤田誠一「黒壁のまち長浜市のまちづくりは、いま」（『かがり火』2001 年 7 月 25 日号）
「インタビュー　まちづくり会社「黒壁」の現状を語る」（『季刊まちづくり』2004 年 7 月）